

距離と方角とに合致するベグラームの東南約十吉米突コ・ダーマン川の左岸で、カフィール・カレ Kafir-Qaleh 又は「異教徒の城」なるものの傍に、保存程度は稍々不良であるが比較的大きく又僧坊を伴ふ塔で、ブールヂ・アフロラを模造した建物の跡が完全に認められるものに遭遇したのは注意するに足るものである。然し、現地に臨むと兎角物の價值を過大視する恐れもあり、又そのうちに譯もなく解決せられることのあり得べき問題に就て、今俄に多言する必要はないであらう。

唯、法師が、終りに掲げてゐる窳覩波の謎に就ては此處に一言せざるを得ない。何故かと云ふと、法師の手記中是れに關する章で、此の塔が如何に重要視されてゐるかと云ふこと及び迦膩色迦王に因のある其の傳説などは考古學者に多大の注意を促がすものであるからである。現在カシユミールで行はれてゐる迷信に照合して、其の傳説の筋を言へば次の通りである。昔カピシヤの西北に當り、都から凡そ二百里(四日行程)位の或る山中に、蛇神かそれとも那伽 Nāga (龍)の住む湖があつて(湖には此の種の傳説が附物である)、晴雨の